

ヒサカキの新たな病害「枝葉枯病」の防除技術について

林業試験場 特用林産部 田中 作治

【はじめに】

和歌山県のヒサカキは国内有数の生産量を誇るが、近年、枝葉が枯れ上がる新たな病害「枝葉枯病」の被害が県内各地で確認されている（図1）。防除技術の早期確立のため、2023年に行った薬剤効果試験（以下、2023年試験）の結果、ベンレート水和剤、トリフミン水和剤の2薬剤に高い効果が認められた。今回、上記2薬剤について薬剤散布の省力化を検討するため、散布間隔をあげ、散布回数を減らす試験を行ったので報告する。あわせて、既存試験・研究結果を踏まえた防除方法について報告する。

【材料と方法】

（1）薬剤散布の省力化の検討

ヒサカキ「枝葉枯病」に対し、2023年試験で効果が認められた散布条件（ベンレート水和剤：7日間隔・6回散布、トリフミン水和剤：7日間隔・5回散布）より散布間隔をあげ、散布回数を減らした試験を行った。試験は、2024年6月に田辺市龍神村西と広川町津木の2箇所の栽培地で行い、2薬剤それぞれ、散布条件を①3回散布（10日間隔）、②2回散布（14日間隔）とした。薬剤の効果を評価する指標である防除価は下記の式により算出した。また、防除価に対する薬効の評価は表1のとおりとした。

防除価=100- [(散布区における被害部の平均拡大長) / 無散布区における被害部の平均拡大長]

【結果と考察】

（1）薬剤散布の省力化の検討

防除価はいずれの試験区においても、2023年試験の結果よりも低くなった（図2）。薬効の評価は、ベンレート水和剤は、①3回散布（10日間隔）では「効果が認められる」、②2回散布（14日間隔）では「十分な効果が認められる」であり、トリフミン水和剤は①3回散布（10日間隔）、②2回散布（14日間隔）いずれも「一定の効果が認められる」であった。また、2薬剤ともに一部被害枝葉から被害の拡大が認められた。

よって、薬剤散布は、7日間隔でベンレート水和剤は6回、トリフミン水和剤は5回散布することが効果的であると考えられた。

（2）既存試験・研究結果を踏まえた防除方法

薬剤は一般に、被害の発生初期に散布するのが最も効果的であるとされる。散布時期は、現地での被害の発生消長調査結果を踏まえると、被害発生初期である5月中旬（梅雨前）からと考えられた。（図3）。

さらに、薬剤散布前に被害枝葉を感染拡大防止のため現場外へ搬出するのと併せて、植栽木の手入れ（間伐・断幹・整枝）を行うことで（図4）、より効果的な防除が期待できる。



図1 ヒサカキ「枝葉枯病」の発生状況

表1 防除価の評価基準

80以上	十分な効果が認められる。
60～80	効果が認められる。
60～80	一定の効果が認められる。
40未満	効果が認められない。

注) 農林水産省の評価基準を一部改変

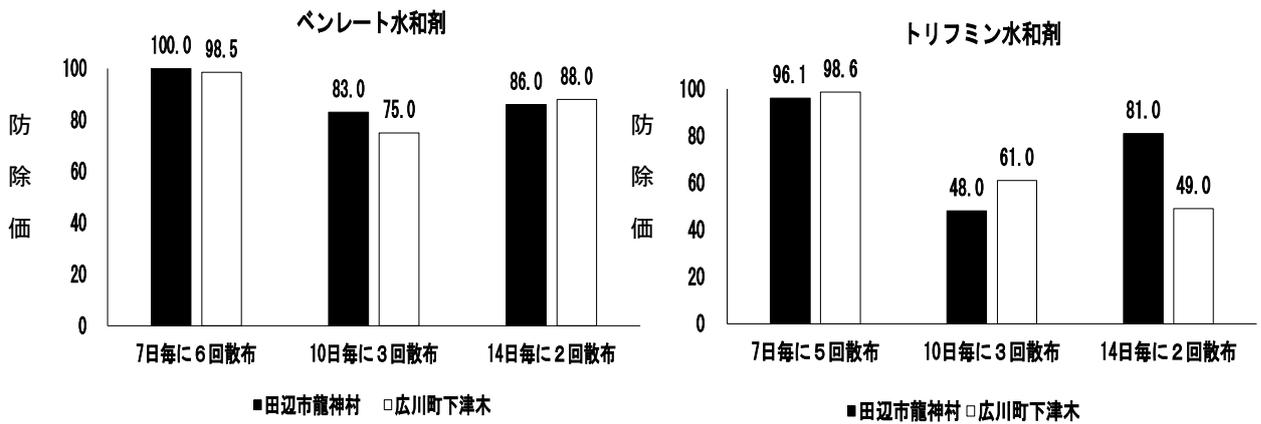


図2 薬剤及び散布回数別の防除価

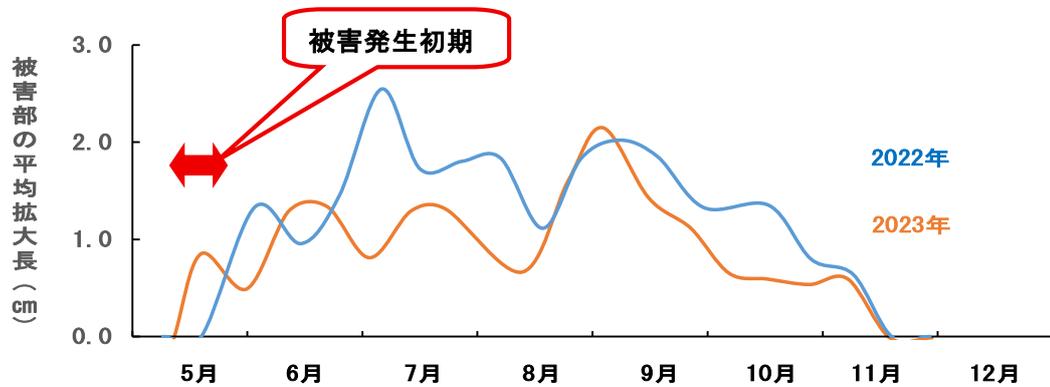


図3 枝葉枯病の被害部の平均拡大長の推移



図4 ヒサカキ栽培地の手入れ(間伐・断幹・整枝)の実施状況